

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2005年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	小峯 和明 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	中世本地物語の研究 — 『熊野の本地』を中心に—		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・ 博士後期課程3年	綿引 香織 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・ 博士後期課程3年	綿引 香織	
研究期間	2005 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本地物は、中世から近世にかけて盛んに作られ続けた、神仏の来歴と信仰の功德を説く物語群であり、中世神話や寺社縁起、唱導などとも深い関わりを持つ注目すべき分野である。本研究は、そのなかの代表的な作品の一つである『熊野の本地』を研究対象とした。それは、本地物の代表的な作品だと広く認められおり、また、中世に大きな影響力を持った熊野信仰史のなかから生まれた宗教文学のひとつでもあるからである。

本研究では、『熊野の本地』における神々の飛来モチーフを中心にとりあげ、本文と挿絵の双方から、その特徴や意義を読み解くことを通じて、中世の人々の神仏に対する意識の諸相を探ることを目指した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[本地物] [熊野信仰] [神の飛来]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

『熊野の本地』は、天竺摩訶陀国を舞台に、様々な苦難を経て再会を果たした親子・夫婦が、日本へと渡り、熊野権現として顕れるまでを語った物語である。物語の末尾では、のちに熊野の神々や眷属となる登場人物達が、天竺から日本へと「飛車」で渡ってくる。前半の舞台であった天竺から、主人公達(神々の前身である人間)が日本(の霊地)へと渡ってくるのは、熊野権現の縁起である以上当然ではあるが、より根源的な問題として、熊野の縁起を語る際に、なぜ舞台を天竺に設定し、わざわざ日本に渡ってくることにしたのかという疑問が浮かぶ。また、神々(の前身)が日本へ渡る手段として、「飛車」という媒体を使う点も興味深い問題である。

本研究では、①『熊野の本地』の諸本において、この部分が本文中でどのように記述されているのか、また②図像ではどのように表現されているかを比較した。この結果を受けて、③『熊野の本地』の諸本を整理し、「飛車」の形状に基づいて分類を試みた。次に、④「飛車」とはどのようなものなのかを古辞書や類書等で確認しつつ、⑤「飛車」や飛来のモチーフが、他の物語ではどのように描かれているのかを参照し、『熊野の本地』の場合と比較した。最後に、⑥熊野に関する他の縁起等を参看して、熊野と「飛来」の問題の関係性について考えることとした。ここでは要点のみ摘記する。なお、基本テキストは逸翁美術館蔵本(以下、逸翁本)を使用した。

①② 逸翁本の記述を分析し、寛永頃刊絵入大本、山岸徳平蔵写本、九州大学文学部松濤文庫蔵奈良絵本等を比較対象とした。諸本を比較した結果、逸翁本の段階では、垂迹の地として日本を選んだ理由は述べられていないのに対し、次第に積極的な意味づけをするものがでてくること、ともに渡る人間の最小単位は王と王子であり、それに伝本によって、ちけん上人や五衰殿女御らが加わること、また、九百九十九人の后達の末路は様々だが、結局日本へ渡ると記されることなどが指摘できる。この記述に対応する逸翁本と諸本の図像を、「飛車」の形状、同乗あるいは追従する人々や、鬼神が登場する場面の有無等の視点で分析した。ちなみに、逸翁本をはじめとする系統の諸本では、五衰殿女御が蘇生し、一緒に日本に渡る条があること、「飛車」が舟の形をしていることが特徴のひとつとなっている。

③ 「飛車」の形状を、仮に五つ(A舟型・B牛車型・C輦典型・D屋形型・E車箱型)に分類した。車の形は様々でも、車輪が付いていることは共通しており、『竹取物語絵巻』の「飛車」が、輦の形で表現されていることが多いのと比べる必要がある。AとEのタイプは、他の物語の飛車を描いた絵と比べても、非常に特徴的だといえる。見慣れた日本の牛車だけでなく、中国の車をも参考にして創造したらしいことは興味深いことである。この基準により諸本を分類し、リストを作成した。

次に、飛車に乗る人間は、人数や組合せの違いこそあるが、必ず王が車に乗っていることが指摘できる。絵では王を絶対の存在として扱っていることを示しているように思われる。また、あとで見るが、飛車が「王の乗物」とされる場合が多かったことも関係しているだろう。これとは逆に、やはり五衰殿女御が描かれるかどうかも問題で、本文の上では蘇生の条はないにもかかわらず、絵では飛来の一行に加えられている伝本がいくつかある。これは、悲劇的な死を迎えた五衰殿女御に対する同情や、蘇生への期待感がうかがえると同時に、女御が日本に渡ったとは記されない伝本でも、この後の垂迹記事で、女御が神になることが、諸本で書かれていることとの整合性を求めたためと考えられる。

④ 古辞書・類書には、ほとんど同じ記事(「奇肱国人、能作_二飛車_一、從_レ風飛行、故曰_二飛車_一」)が引用されている。「飛車」について最も説明が詳しい、狩谷掖斎の『箋注倭名類聚抄』によれば、これは『山海経』を元にしており、「飛車」が登場する日本の文献として、『うつほ物語』や『竹取物語』などが挙げられている。そのおおもとを辿ると、『山海経』というよりは、『山海経』の最古の注釈書である郭璞の『山海経注』、あるいは『博物志』の伝承に行き着くようである。『山海経注』が書かれた三世紀末ごろには

研究成果の概要 つづき

少なくとも「飛車」という言葉が定着していたと言え、そしてこの記述が、後続の類書等に受け継がれていき、日本にももたらされたことが窺える。

⑤ ④で確認した「飛車」の概念が、日本にもたらされたあと、どのように変化し、物語の中で用いられているのかを探った。物語で現存最古の用例は『竹取物語』であり、異国から日本へ渡るときに使用されている。この他、竜宮へ行くときに使われる『月王・乙姫物語』、天竺国内で王の乗物として使用されている『今昔物語集』や『橋立の本地』等の例がある。また、『古事因縁集』をはじめとした四天王と吉祥天の因縁譚のなかで、五人兄弟のうち、北天竺王として生まれ変わった四男の持ち物とされるのが「飛車」だった。中国に由来する「飛車」の語が、少なくとも『和名類聚抄』の成る九三四年頃までには、その知識が類書などの形で日本にもたらされ、『竹取物語』をはじめとする物語のなかで、主に異国・異界との往来に使われたのである。そこには、「飛車」は王の持ち物・乗物であるという認識もあったことが窺える。

⑥ ここで改めて〈飛来〉の物語をめぐる問題を考え、まとめとした。

熊野の根本縁起とも称される「長寛勘文」所載の『熊野権現御垂迹縁起』では、唐の天台山から八角の水晶（王子信の旧跡）が彦山に天降り、最終的に熊野に鎮座したとされており、熊野はすでに根本縁起の段階で、「飛来」のモチーフが深く関与していたということがわかる。霊鷲山や天台山などの霊山の一角がかけて、日本に飛来して〇〇山となったと語る説は、寺社の権威を高める行為としてしばしば用いられるものであり、御垂迹縁起もこの系統に列なるものであることはすでに指摘されておりである。またそれに加えて、『熊野山略記』巻一の記事では、蓬萊山が熊野に飛来したとされたり、熊野に関わる他の縁起、例えば『大峯縁起』などでは、天竺摩訶陀国の王を熊野権現の前身として設定されている。このように熊野には、異国からの飛来を語る伝承・縁起が複数伝わっている。さらに、異国人の存在が決して珍しくなかったことは、『台記』、『熊野山略記』巻二などに窺える。つまり、「熊野」という場にとって、異国からの神々の「飛来」のモチーフは、ごく自然なものであったのである。

また、〈飛来〉によって天竺から日本に渡ってくるのは、異国出身の神々だけではない。一部の伝本にみられる、富や幸福も同時に異国からもたらされるという言い方には、異国や舶来物への憧れというものも背景にあると思うが、神々の「飛来」のもつイメージを一方で表しているように思う。

また、『熊野の本地』の飛車の絵を分析した結果、特徴的なものとして浮かび上がってきたのは、「飛ぶ車」とあるにもかかわらず、船の形で表現されている、逸翁本系や寛永版本等の例であった。実はこの舟型こそ、非常に重要なものだといえるのである。古来、熊野と船の関係は深いもので、熊野がもともと良質の木材の産地だったことは有名であり、『万葉集』では、「真熊野の舟」「熊野舟」として名前が挙げられ、当時からよく知られていた。『伊予国風土記』逸文では、熊野という舟が石になって残り、「熊野峯」の地名の由来となったと語られている。『日本書紀』の「熊野諸手船」は、実際の形などの詳細は判っていないが、天を飛ぶ舟に「熊野」の名が冠せられていることは、非常に示唆的である。舟型の飛車は、「熊野諸手船」「熊野舟」と関わりがあるという西田長男氏の指摘は、首肯すべきものだといえるだろう。このほか『先代旧事本紀』や『万葉集』等では、「あまのいわふね」という、神を乗せて天下る船が登場する。神の乗り物は、もともと船と考えられていたのであり、『熊野の本地』の舟型の飛車は、まさにこうした神話世界の、図像上の再現ともいえるであろう。